



海辺の二人

『海辺のライムソーダ』番外編

尾上セイラ

Seira Onoue

みずかねりょう

Mizu Kane Ryou

この作品は（株）心交社に帰属します。
無断複写・複製・転載を禁じます。

桂木照彰かつらぎてるあきの恋人、ケンケンは、パーフェクトな男だ。

実家は相当な名家だが、ケン自身は家からは独立していて、三十三歳にしていくつものリゾートホテルを経営する実業家である。それに加えて、人を魅了する甘いマスクに優しく穏やかな人柄とくれば、恋人がいたとしても密かに秋波を送る男女は後を絶たない。

照彰が大学の卒業と同時にタイへやって来た当初は、色々な場所にケンと顔を出す度に、「君じゃケンと釣り合わない」などと、やつかみ半分によく言われたものだ。

照彰も付き合い出した頃は、何故ケンほど完璧な男が自分のような「普通」の男と付き合ってくれているのか、不思議に思うこともあった。

だが、いかに「完璧」に見えたとしても、人間である以上、何かしら欠点はある。恋人になってみて初めて、照彰は意外なケンの一面を知った。

ケンケンは、実はものすごく嫉妬深く、独占欲が強かったのだ。

「ただいま」

夕方犬の散歩を終えて、あかね色の光がふんだんに差すリビングに顔を出すと、ケンはずつと背中を預け、仏頂面ぶつどうめんでテレビを見ていた。

照彰がタイに来てから飼い始めた、黒いラブラドルレトリバーの「マナオ」が、嬉しそうに尻尾を振りながらケンの方へ飛んで行く。マナオを右手で撫でてやりながら、ケンはむすっとした顔つきで照彰を無視したまま、テレビをじっと睨にらんでいた。

——まだ怒ってるのか……。

冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出しながら、照彰はケンの様子を窺った。

昨夜から、ケンはずつとあの調子だ。怒っているというよりも、どちらかというところと拗すねていると言った方が正しいかもしれない。

照彰は現在、バンコクの語学学校に通っている。ホアヒンから三時間もかけて通うのは大変なので、月曜日から金曜日まではバンコク市内にアパートを借り、週末だけホアヒンに戻ってきている、いわゆる「週末婚」のような状態だ。

と言っても、ケンは、週に二回はバンコクでの仕事を入れ、その度に照彰のアパートに泊まってくいで、それほど寂しくはない。一年続いた日本とタイとの遠距離恋愛に比べれば車で三時間の距離など無いに等しいし、それに、寂しさを感じないほど語学学校のクラスメートとの関係も良好で、照彰のタイでの日々は充実していた。

だが、ケンの方は、少し不満に思うことがあるようで……。

照彰は水を飲みながらシンクに手を突いて、チラリとケンを見た。

ケンカの発端はつたんは、金曜日に照彰がクラスメートの青年と飲みに行ったことだった。

語学学校に入学してすぐ、照彰は同い年で同郷の日本人の青年と親しくなった。彼はノーマルだったし、照彰はどうとも思っていなかったのだが、何故かケンは、その青年と照彰が二人でいるのを嫌がった。

戸惑いはしたが、ケンが嫌ならと、照彰は極力彼と二人になる状況を避けるようにしてきた。しかし、いくら気をつけたところで、どうにもならない時というのがある。

金曜日も、最初は女性含む数人のクラスメートと食事に行ったのだが、照彰は珍しく酔っ払い、気付いたらその青年と二人だけになっていた。

照彰がグダグダに酔っているのを電話で知ったケンには、バンコクでの仕事を早々に切り上げて店まで迎えに来てくれた。しかし、照彰が青年と二人でいるのを見て機嫌を損ね、昨夜の帰り道は、一言も口をきいてくれなかった。

寝て起きたら機嫌も良くなっているかと思っただ、そうはいかなかった。

水を飲みながらどうすべきか逡巡し、照彰はそっとため息をついた。

嫉妬してもらえるのは嬉しいが、自分はそんなに信用がないのかと思えば、少し悲しくもなってくる。

照彰は飲みかけのペットボトルをシンクに置くと、相変わらず自分を無視しているケンの側まで行き、顔色を窺いながらそっとソファに腰を下ろした。

マナオが喜々として、小さくはない体をケンと照彰の間にねじ込んでくる。砂浜を駆け回ったせいで少し熱いその体をそっと撫で、照彰はケンの顔

を覗き込んだ。

「ケン、機嫌直してよ。最初から彼と二人だったわけじゃないんだってば」

もう何度か説明した昨夜の事情を、もう一度訴えてみる。けれど、ケンは僅かに整った眉を動かしただけで、あとは銅像のように固まったままだ。照彰は小さくため息をついた。

「俺、ケンが心配してるほどモチないって。第一、ノーマルの彼が俺のこと狙ってる訳ないじゃん」

悲しいけれども正しい意見を口にする、ケンはようやく照彰に向き直った。

「そういう風に自己評価が低いから、いつまでたってもテルには危機感が育たないんだ」

「自己評価って……そういう問題じゃないと思う。はっきり迫られれば、俺だって一線引くよ。でも、仲良くなった相手全員に線引きしてたら、友達なんてできないだろ」

ムツとして言い返すと、ケンは黙り込んだ。

「それはそうだけども……でも、あいつは、テルを見る目が怪しい」
 一体何を根拠に、と思うのだが、ケンには結構頑固なので、一度言い始めた
 ら聞かない。

「じゃあ、俺、どうしたらいいの。折角仲良くなれたけど、彼と縁を切れ
 ば、ケンは満足なわけ？ それで俺が独りぼっちで寂しい学校生活送って
 も、ケンはいいんだ？」

悲しそうな顔で告げると、ケンは眉尻を下げて黙る。いいとは思っていない
 ようだが、考えを変える気もなさそうだ。しばらくケンの顔を見つめてい
 た照彰は、やがて大きく息を吐いた。ケンの気持ちが変わらないなら、この
 まま話し合っていていいムダだ。

「そう、分かった」

言い捨てて立ち上がろうとすると、ケンがハツとしたように顔を上げ、照
 彰の手首を掴んできた。沈黙が漂うリビングに、妙にテンションの高いタイ
 の番組の音声と、マナオの「ハッ、ハッ」という息づかいだけが響く。

「そういうつもりで言ったんじゃない」

苦しそうな顔でケンがポツリと呟いた。

「でも、結果的にはそうなるだろ？ この先も、俺はケンが少しでも怪しい
 と思った相手とは友達にすらなれない。そういうのって……息が詰まるよ」
 言ってしまったから、照彰は言いすぎたと反省した。束縛されるのはそん
 なに嫌ではないのだ。むしろ、ケンの愛情を実感できて嬉しい時の方が多
 い。

だが、今回のように納得できないことに対しては、きちんと話し合おうと
 照彰は決めていた。どちらかが一方的に我慢していたら、いい関係など築け
 ないのだから。

「……ごめん」

ケンがぎゅっと照彰の手首を掴む。項垂うなだれているケンが、叱しかられた子供の
 様な顔をしているのを見て、照彰は堪らなくなった。

「俺は、ケンが好きだよ。ケンしか好きじゃない。たとえ彼から告白された
 としても、心は微塵みじんも揺らがない自信がある。……信じてもらえない？」

ケンに向き直って聞くと、ケンはぎゅっと眉根を寄せ、ソファに座った

まま照彰の腰を抱き寄せてきた。

「不安なんだ。いつか誰かに、照彰を取られそうで」

小さな声で呟く男の硬い髪の毛を優しく撫でながら、照彰はそっと微笑んだ。

「それは、俺の台詞だよ。ケンの方が圧倒的に言い寄られる回数、多いだろ」

そう言うと、ケンは照彰の腰に抱きついたままゆるゆると首を振った。

「テルは、自分の価値を全然分かってない」

そう言われて、照彰は苦笑した。そう言ってくれるのはケンくらいのものだと思うのだが、これに関してはいつも話が堂々巡りになるので、黙っていることにした。

そっとケンの手を腰から引き剥がし、床に膝を付いて、ソファアに座っているケンと視線を合わせる。両腕をケンの首に回し、照彰は伸び上がってケンの唇に軽く口づけた。

「仲直りしよう？ 折角一緒にいるのに、ケンカは嫌だよ」

そう言うと、ケンはぎこちないながらも、ようやく微笑んでくれた。ソファアに座り直した照彰の腰に、すかさずケンの手が伸びてくる。トクトクと心臓を高鳴らせながら、照彰は目を閉じて降りてきたケンの唇を受け止めた。震えがくるほど甘いキスで、体の熱を煽られる。ケンの手がシャツの裾から忍び込んできて、素肌を撫で――。

「ウワンツ」

怒ったようなマナオの声に、照彰とケンは我に返った。

ソファアから飛び降りたマナオが、自分を無視していちやっっている二人に抗議するように唸り声を上げ、二人の間に割って入ろうと飛びかかってくる。

「こらっ」

照彰の膝の上に乗っかるうとしてケンに叱られ、マナオはしゅんとして頭垂れた。

「寂しかったんだよな。ごめんな」

体を起こして抱き上げてやると、マナオは嬉しそうに尻尾をパタパタと揺

らした。そんなマナオを、ケンが恨めしそうな顔で見ている。おかしくて、照彰は思わず吹き出した。

「続きは夕飯の後で、な」

ケンの耳元で囁くと、「夕飯」という言葉にマナオが反応して勢いよく吠えた。

「マナオ……」

ため息をつくとき、ケンはタイ語でマナオにブツブツ文句を言い始めた。

『お前、僕とテルの仲の邪魔ばかりしてたら、焼いて食べちゃうからな』それを聞いて、照彰はマナオの鼻先に口づける。

『パパは酷いこと言うね〜』

そうタイ語で言っていると、ケンは少しバツの悪そうな顔になった。必死で勉強しているので、今はもう簡単な会話くらいなら難なくこなせる。

ケンとタイ語で話せることが嬉しくて、照彰は満面の笑みを浮かべた。

『夕飯、何にする?』

続けてタイ語で聞くと、ケンはまだ微妙な顔をしている。

『好きな物作ってあげるから、機嫌直して』

頬にキスして言うと、ケンはようやく表情を緩めた。

「じゃあ、お好み焼き」

「また? 好きだね」

「二人で焼いて、分け合いながら食べるのが好きなんだ。幸せな気持ちになれるから」

真剣にそう語られて、照彰は胸が温かくなるのを感じた。

「ねえ、ケン」

ずっと考えていたことを言ってみようと、照彰は口を開く。

「もし嫌じゃなかったら、クラスメートの彼に、ケンのこと紹介してもいい?」

驚いた顔をして、「いいのか」と問うように、ケンが照彰を見つめてくる。

「そりゃあ、ゲイだってバレるのは、ちょっと怖いけど……それで避けられたら、その程度の人だったんだって思うことにする」

夕日に照らされたケンの顔に、ふわりと優しい笑みが浮かぶ。

「テル……。ありがとう。嬉しいよ。嫉妬ばかりして、ごめん……」

嬉しそうな、それでいて情けないような表情を見せた後、ケンには照彰をぎゅっと抱き締めてくれた。その腕に収まりながら、照彰は首を振る。

「いつもだとちよつと困るけど、でも、いいよ。俺も嫉妬されて嬉しいって思うから」

見上げると、ケンと目が合った。穏やかな微笑みを浮かべる恋人を、照彰はまぶしい気持ちで見上げた。

ケンは、パーフェクトではない。でも、ダメな所も全部ひっくるめて、この人が好きだ。

照彰はケンの笑顔に胸をときめかせ、照れ隠しに彼の鼻先へとそつとキスをした。

(終)